

キャリル・フィリップス『ザ・ネイチャー・オブ・ブラッド』 における語りの構造

太田垣 聡子^{*1}

The Structure of Narrative in *The Nature of Blood* by Caryl Phillips

Satoko Otagaki^{*1}

The Nature of Blood, written by a British novelist Caryl Phillips, consists of the fragments of four, independent and unrelated stories. Although each story deals with dispersed periods, locations, characters and situations, it depicts diasporas (being either Jews or blacks) as its protagonists without an exception. They are subjected to such predicaments as racial discrimination, genocidal attack, ostracism, isolation, and homelessness.

It should be also noted that, these seemingly disjointed stories are sometimes linked thematically by the correspondences of their motifs or the circumstances of their characters. In addition, the notion of “time” in this text seems to be different from the traditional one. Instead of passing like a linear streamline, the flow of “time” in this narrative becomes reversed or intertwined, and even sometimes the borders between past, present and future become vague. Considering those factors—complex network between the stories, and new concept of the figure of “time”—it can be said that this labyrinthine structure of the narrative itself reflects what is described in the text, so to speak, an endless circulation of the world’s history and the wandering of diasporas, multifarious aspects of human identity, and so on. This literary work cannot be reduced to the single interpretation. Rather, it suggests that it’s necessary to constantly question a matter of course, and to keep trying to find the new point of view. Then, it may become possible to replace and subvert the concept which has been considered as the universal truth.

序論

『ザ・ネイチャー・オブ・ブラッド』(*The Nature of Blood*) は、イギリス人作家キャリル・フィリップス (Caryl Phillips) の 6 作目の小説である。著者フィリップスは、西インド諸島生まれで、生後まもなく家族で英国へ移住しそこで育ったというブラック・ブリティッシュ^{*2}である。黒人としてヨーロッパで育ったという経験が、自身の創作活動の源となり、その文学作品の基盤となっていると推察することができる。

『ザ・ネイチャー・オブ・ブラッド』は、主に 4 つの物語から構成されている。

①ユダヤ系ドイツ人の元医師で、妻子も親兄弟も仕事も捨て、イスラエル建国のために闘う人生を選

んだステファン・スターン (Stephan Stern)。

②ステファンの姪で、21 歳のユダヤ人エヴァ・スターン (Eva Stern)。第二次大戦中ナチスによって強制収容所へ送られるも、辛うじて生き延びる。

③15 世紀のヴェネツィア共和国を舞台にした、ユダヤ人迫害の物語。

④16 世紀のヴェネツィアに、共和国軍を指揮するためやって来た黒人将軍の物語。

それぞれの物語が章立てされているわけではなく、断片がかわるがわる登場するというかたちでこの小説は進んでいく。①と②の登場人物が親戚である以外、各物語間に接点は特になく。時代も、地域も、登場人物の年齢も性別も人種も職業もそれぞれ異なる。語りの人称や時制は様々に変化し、出来事が時系列順に並んでいるわけでもない。所々に、誰

^{*1} 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター非常勤講師

^{*2} 「世界」2003 年 4 月号 (岩波書店) 作家キャリル・フィリップスの世界 P.203
2006 年 10 月 3 日 受理

の声でもない語りが挿入されている。これらの特徴を見ると、この作品は構成が複雑で、読者にとって読みづらくまた解釈しにくいテキストだと言えるのである。

4つの物語の共通点としては、舞台がいずれもヨーロッパであること、そして登場人物が皆、故郷を喪失したディアスポラであることが挙げられる。また、④以外の物語は、主人公が皆ユダヤ人である。よって、この作品は、ヨーロッパにおいて「異質な者」「よそのもの」が生み出され、迫害・排除されてきた歴史を、被害者達の語りを通して描いたものとして解釈することができる。

では、一見互いに関わりのない物語の断片がランダムに並ぶことで成り立っているこの作品を、どのように読むことが有意義なのであるか。作品がこのような形式で構成される必然性は、どのような点にあるのだろうか。

本論では、まずこの作品におけるディアスポラの表象を取り上げて分析する。その上で、作品の構成や語りの特徴と、作品で語られている内容（ディアスポラ達の物語）との関連性を見出す。更には、文学の読みを通じて開ける多文化主義への視点の可能性を探りたい。

血の性質

この作品の特徴の一つとして挙げられるのは、各物語が有名な文学作品を彷彿とさせるという点である。例えば、エヴァ・スターンは、その経験から、『アンネの日記』(*The Diary of Anne Frank*)のアンネ・フランクを読者に想起させる。ただし、『アンネの日記』が書き手の死によって突然終わるのに対して、エヴァ・スターンは強制収容所から一人生還するため、物語は彼女が生き残った後も続く。彼女の物語は、あり得たかもしれないもう一つのアンネ・フランクの可能性を提示していると言える。また、15世紀ユダヤ人の話は、金貸しのユダヤ人シャイロックが人々に嫌われる悪人に設定されているという点で、シェイクスピアの『ヴェニスの商人』(*The Merchant of Venice*)をイメージさせる。また、ユダヤ人が子供を殺した疑惑で裁判にかけられ処刑されるというこの話は、中世からルネサンス期においてヨーロッパでユダヤ人ゲットーが拡散し

ていく中で実際に起きた事件^{*3}が下敷きになっている。更に、ヴェネツィアの黒人將軍の物語は、シェイクスピアの『オセロ』(*Othello*)を我々に想起させる。というより、これはオセロの物語そのものである。作品中でこの將軍の名前が言及されることは一度もない。しかし、彼が結婚する相手の名前がデズデモナ (*Desdemona*) と述べられているため、この物語はオセロ本人による一人称の語りと理解してよさそうである。

このように、この作品を構成する物語は、我々が既に知っている文学作品や史実のパロディー、もしくは視点を変えた語り直しという形で現れる。時代も地域も登場人物も異なるこれらの物語が紡ぎ合わされることで、ヨーロッパにおける差別・迫害・悲劇の歴史が改めて浮き彫りになっている。

登場人物達の不幸を決定づける要因となっているのは、作品のタイトルにもなっている「血」(*blood*) であると言える。タイトルの *The Nature of Blood* は、「血の性質」とでも訳せる言葉だが、まさに血の持つこの性質によって、人間の運命が決定されていく様が描かれていると言えよう。ユダヤ人がゲットーという隔離された空間で生活せざるを得ず、頻繁に攻撃や迫害の対象となったのも、オセロとヴェネツィア市民との決定的な違いである「肌の色」(*complexion*) ^{*4}を作ったのも、ステファンが己のアイデンティティとイデオロギーのために過酷な人生を選んだのも、エヴァの家族を死に追いやったのも、全て「血」の持つ性質ゆえである。つまり血とは、人間を差異化し、隔てる要素として機能していると言える。民族の同一性・純潔・アイデンティティを、確立・補強・確認するための方便として、「他者」という存在・概念を捏造し構築することが必要になる。その結果、ユダヤ人や黒人などが、他者・外部の象徴として、目に見えるかたちで共同体から排除されていく。その結果、この作品の登場人物達のように「異質な者」「よそのもの」とされて、人間の尊厳や生命を奪われたり、帰属場所を失ってディアスポラとなったりする人間が生み出されることになる。

しかしそうした事実がある一方で、彼らの不幸な境遇を生んだ責任の所在や、悪の根源と言うべき存在が、作品内では明確なかたちで描かれない。もちろん、ステファン・スターンとエヴァ・スターンの

^{*3} 1144年に英国ノリッチで、復活祭と過ぎ越し祭の直前にウィリアムという少年がユダヤ人の家に入るところを目撃されたのを最後に行方不明になり後に死体で発見され、ユダヤ人が儀式のため少年を殺した疑惑で監禁・告訴された事件などがある。 ポール・ジョンソン『ユダヤ人の歴史』阿川尚之・池田潤・山田恵子訳(徳間書店、1999年)上巻 pp.348-53

^{*4} Caryl Phillips, *The Nature of Blood* (London: Faber and Faber, 1997) P.115
以後、本文での引用後に頁数を記す。

物語においては、ホロコーストおよびそれを引き起こしたナチズムという敵・原因があることは誰の目にも明らかである。が、各物語において、登場人物達を苦しめる元凶の存在は、いまひとつ特定しにくくなっている。例えば、15 世紀ヴェネツィア共和国のユダヤ人が少年殺しの容疑で告発されるのは、町の人々の声によってであるが、それはあくまで匿名のものであり、特定の顔も名前も声も言及されることはない。告発されたユダヤ人達の処遇を決定することになるのは共和国議会と裁判所であるが、彼らの決定は民主主義という名のもとに成されている。捕らえられたユダヤ人セルヴァディオ (Servadio) 達の拷問や死刑に際しても、そこにいるはずの執行人の姿や行為が描写されることはない。また、エヴァの語る強制収容所の場面で、ドイツ人兵士達の残虐な行為は具体的に描かれているも、彼ら自身の姿、顔、声は登場せず、人格化はされていない。

むしろ、登場人物達の不幸な境遇に絶えずまわりついているのは、実は、人間の善意めいた好意や、理想や英知などであるとも考えられるのである。強制収容所から生還したエヴァがイギリスへ渡ったのは、解放軍として収容所に駐留していたイギリス人兵士ジェリー (Gerry) が安っぽい同情から彼女に発した軽率なプロポーズの言葉を、彼女が信じたからである。ジェリーには妻子がいたため、結局エヴァの希望は打ち砕かれる結果となる。また、15 世紀ヴェネツィアにおいて共和国議会が発令していた法は、ユダヤ人の生活や権利を保護する目的であったはずが、彼らの生命を奪う解釈へと反転した。また、作品の最終部分 (現代のイスラエル) に登場するエチオピア系ユダヤ人マルカ (Malka) の境遇も、イスラエルという国家の掲揚する崇高な理想が全く機能せず、むしろ裏目に出た例である。シオニズムという理想のもとで、アフリカにいたユダヤ人 (黒人) 達が約束の地・イスラエルに呼び戻され移住したまではよかったが、白人が大半を占めるイスラエルで彼らを待っていたのは、差別による排除と苦難の日々であった。

つまり、人間の善意、理想、啓蒙的思想などは、それが持つ無知や浅薄さ、その両義性などから、容易に悪い結果へと反転しうるものであり、そこから、弱者、被抑圧者、マイノリティーといった被害者を生み出す可能性をはらんでいる。そして、そういっ

たものの方が、市井の人々や平凡な日常の中に無数に存在するが故にむしろたちが悪く、その原因の所在を突き止めたり根絶したりすることがほとんど不可能であると言える。エヴァの語りにおいて、数回発せられる言葉 “How is it possible to be so angry with people who have done you no wrong?” (93, 162)

(何も悪いことをしていない人々に対してどうしてそこまで憤ることが出来るの?) (筆者訳) は、具体的な悪の責任者・行為者に向けられているだけではない。それは、どこにでもいる普通の人々の中に存在する悪意や、あまりにもありふれたことであるがゆえにその原因を解明することすらできない悪や恐怖に対しての、無力感のあらわれだと言える。そうした悪意や心の闇や恐怖は、作品内で頻繁に描写される「血液」としての blood のイメージ^{*5}と同じくらいいたる所に充満しており、その源を探し出して断つことも拭い去ることもできないのである。

繋がる物語

この作品は、一見、それぞれが独立し、互いに関連のないディアスポラ達の物語がランダムに並んでいるように思われる。しかし、登場人物やストーリーやテーマに関して、物語同士に共通点が存在する例が、いくつも見られる。例えば、15 世紀のヴェネツィア共和国におけるユダヤ人迫害と、エヴァの物語で語られる 20 世紀のホロコーストは、繰り返される民族虐殺の歴史という点で共通している。また、黒人将軍 (オセロ) とステファンは、自国の妻子を捨て、これまでとは違う人生を送ることを決断したという点で、パラレル関係にある。また、エヴァとマルカは、自分の意志とは関係なく故郷を失い、新天地を求めるも疎外され、失望して行き場を失ってしまった存在であるという共通点がある。また、オセロとマルカは、白人社会において、黒人というマイノリティーとして生きていかざるを得ないという点で共通している。また、オセロが住むことになった 16 世紀のヴェネツィアと、エヴァがジェリーを頼って到着したロンドンとの間にも、共通点が存在する。共に、帝国としての栄華を誇り、世界の中心たる勢いを持つ都市である。その勢いゆえにあらゆる人種の人々を惹きつけ受容するコスモポリスのように見えながら、実は、オセロやエヴァのよ

*5 15 世紀イタリアのユダヤ人が儀式のために少年から抜いたとされる血、強制収容所に送られる車内でのユダヤ人女性の生理、精神病院で手首を切ったエヴァから流れる大量の血などの具体例が挙げられる。

うな部外者にとってはどこかよそよそしく、迷宮のように理解しがたい町として描かれている。更に、作品全体の舞台であるヨーロッパと、イスラエルという国家にも、時代を通じた共通点がある。ユダヤ人は何千年にも渡って離散と流浪の民族であった。常にホスト国からよそ者扱いされ排除されてきた側だったが、ついにイスラエルという自分達の国家を作った。しかし、それがシオニズムを実現した、全てのユダヤ人にとって理想の国家になったかと言えば、マルカの例に見られるように必ずしもそうではないようである。これまで排除されてきた側のユダヤ人が、ひとたび自分達の国を獲得すると、結局は他のヨーロッパ諸国と同じように他者を排除する共同体になってしまったという皮肉な歴史が繰り返されている例が、ここに見られる。

このように、同じ出来事やモチーフが、時間・空間・人物を超越しながら繰り返されているのが、この作品の特徴である。それは、あたかも地球上を水がその形状を変えながら循環するかのごとく、歴史が連綿と反復していく様子を連想させる。ここで思い起こしたいのが、この作品全体を支えるテーマである「血の性質」である。血は、液体であることから、水のような流動性・可変性を持つと言うこともできる。前述したように、民族やアイデンティティの名のもとに人間を差異化し隔てるのが「血の性質」であるという一方で、一見関わりのない物語同士や、疎外されているように見える登場人物同士を、時代を越えてこうして結び付けているのもまた、「血の性質」であると言える。

循環する時間

同一モチーフの時空を越えた繰り返しに加えて、この作品のもう一つの大きな特徴は、時系列を無視した語りである。しばしば、一つの物語が時間の経過通りには語られず、時間を行きつ戻りつするかたちで提示されている。また、同じ物語内で、時制のみならず、人称の変化が起こることもある。読者は、話の経過やつながりを追ったり、語り手とその物語の関係を究明したりすることに苦勞するわけだが、このことによってまさに、過去・現在・未来という時間の流れや区分が曖昧になっている。そしてそれは、登場人物の身にも起きていることであり、例え

ば、過去の亡霊がリアリティーを持って現実に侵入してきたり（解放後の強制収容所で、生還したエヴァのもとに現れる、死んだはずの母親の姿）、過去の記憶が未来へつながっていたり（老いたステファンが手を伸ばした先にあるのは、彼が過ごした月日の記憶である、という作品のラストシーン）、というように、過去の記憶と現実と未来との境が不明瞭になるという現象が見られるのである。

反復する歴史、一方向ではない時間のベクトル、過去・現在・未来の区分の曖昧さ、これらの特徴を考え合わせると、この作品における「時間」というものの在り方や捉え方を、新たに設定することが可能になる。つまり、ここでの「時間」の概念とは、一方向に同速度で流れるリニアな状態ではなく、蛇行したり絡まったりしながらも繋がっている輪のような状態だと考えられるのである。輪であるために、時間は、ぐるぐると際限なく循環する円環構造となっている。よって、この場合において、「始まり」や「終わり」という概念は存在し得ない。「始まり」や「終わり」という言葉は、時間を、点と点を結んでできる一本の線状のものとして考える従来の概念においてのみ成立するからである。よって、時間の経過と、「前進・成長・進歩・進化」といった言葉が直結するのは、従来の伝統的な概念の枠組下でのみ可能なことである。こうした発想が一切当てはまらない「時間＝円環構造」というこの捉え方は、全く次元の異なった観念であると言える。

この作品の登場人物達は皆、ディアスポラであり、故郷や帰属地を喪失している。彼らの境遇は、想像を絶する困難な状況である。そしていずれの物語も、特に救いも希望も見出せないまま唐突に幕を閉じる。しかし、帰属地をゴールと考えるのは、時間を一本の線として捉える観念に基づいた発想である。そもそも、物語のハッピーエンドやアンハッピーエンドという言葉は、時間に「エンド」があると捉えるからこそ成立し得る言葉である。そうではなくて、物語がどこかで再び繰り返されるとしたら、どうであろうか。彼らを語る言葉は、テキスト上では確かに終わりを迎える。しかし、時間が円環状に際限なく流れているとするならば、作品内で起こっている現象―ストーリーやモチーフの繰り返し―と同様に、これらの物語がテキスト外で、もしくはこのテキストそのものの内部で無限に反復されていると

いう解釈の可能性が開けてくるのである。いみじくも、この作品の最終フレーズ“reaching across the years.”(213) (月日の向こうへ届きながら) は、歳月を隔ててこれらの物語がまたどこかで繰り返されるという可能性を示唆している。そういった意味では、この作品は、無や絶望とは対極にある存在や希望を提示していると言うことも出来るだろう。キャリル・フィリップス作品の研究者ベネディクト・レデント(Benedicte Ledent)は、以下のように述べている。

There are no new beginnings, the novel soberly suggests, but some uncertain beginning is possible provided it does not leave the past behind, provided it views life, (...) not as a succession of ruptures, but as a series of passages.^{*6}

(この小説が指摘するのは、新しい始まりなどというものではなく、ある不確かな始まりが可能だということである。過去を置き去りにせず、人生を切れ目の連続としてではなく通過点の連続としてみなすのであれば。)(筆者訳)

時間は、切れ目なく流れていく水のようなものであり、そこに新しい始まりや区切りは存在しない。あるのは、「不確かな始まり」(“some uncertain beginning”) だけである。これは、何も変わらないように見える繰り返しの中でも、少しずつだけ変化が加わっていくということである。いわば、“changing same”とも呼ぶべきテーマが、この作品全体には流れているのである。歴史上の出来事、人間の運命、所業などが、同じ核を持ちつつも、少しずつかたちを変えながら、テキスト上にあらわれてくる。

この“changing same”のモチーフは、作品の文体にも反映されている。簡潔でリズムカルな言葉の反復の中に、時折、内容や質の異なる言葉が挿入されていくという手法が、作品内でしばしば用いられている。以下の引用のように、特にエヴァ・スターンの語りにおいて、このスタイルの文体が多く見受けられる。

Swollen legs? A forgotten head kerchief? A soiled uniform? Step forwards. Goodbye. A scratch on a

leg? Puffed with malnutrition? Step forwards. Good bye. (181)

(腫れた足? 忘れられたスカーフ? 汚れた制服? 前へ進め。さようなら。足の引っかき傷? 栄養失調でふくれている? 前へ進め。さようなら。)(筆者訳)

これまで述べてきたように、この作品の構造、語り、時間の概念は、読者にとっては一見把握しにくく解釈しづらいものである。テキスト自体が、まるでディアスポラである登場人物達の人生そのもののよう、一ヶ所に留まることなく多方向へと流れ、掴みとられることを拒絶するかのように複雑なものとなっている。読者は、迷宮のようなテキストに足を踏み入れることになるわけだが、それはまさに、陸地と運河が複雑に混在する迷路の町ヴェネツィアをさまようオセロのように、自らの立ち位置や方向感覚を疑いながら確認する作業の連続であると言える。このテキストの、単純で一義的な読解は不可能である。ディアスポラの人生や運命に対して、伝統的な解釈が成立しないのと同様に、それを語る物語の構造もまた、複雑で多義的な広がりを持っている。それぞれに関連がない4つの物語の断片を羅列しているだけのように見えるこの手法は、こうして物語内容に作品構造を反映させ、作品全体が意義を持って有機的に成立することを可能にしているのである。

結論

この作品には、人種差別、民族迫害、ジェノサイドなどの人類の不幸な歴史によって、生命、尊厳、帰属地などを奪われた人々の様子が克明に描写されている。そこで読者が目にする人間の過ち、救いがたい絶望感、無力感などは、到底拭い去ることはできない。しかし、それを生んだ悪や責任の所在を突き止め断罪しようとする行為もまた、新たな不幸を生む可能性をはらんでいる。また、この作品を、「善と悪」、「存在と不在」、「自己と他者」、「被害者と加害者」などの二元論に還元して解釈しようとすると、読解の可能性を閉じてしまうことになる。

ディアスポラ達の語りや、そこから浮かび上がってきた時間概念の新たな枠組みを通じて我々に関

^{*6} Ledent, Benedicte, *Caryl Phillips* (Manchester University Press, 2002) P.147

かれているのは、伝統的価値観や既存の概念から自由になった視点や発想を持つことの可能性である。つまり、これまで当たり前とされてきた観念や「中心」や「絶対的なもの」を、転覆し相対化する契機を、この作品を読むことで、生み出すことが可能なのではないだろうか。

それは、作者キャリル・フィリップスの、書き手としての姿勢そのものにも反映されていると言える。ブラック・ブリティッシュの男性でありながら、その文学作品において、白人や女性やユダヤ人の視点に立った物語をいくつも創作してきたフィリップスに関して、ジェイムズ・シャピロ(James Shapiro)は、次のように述べている。

Mr. Phillips also challenges the current literary tribalism, pervasive in this age of identity politics, that would mark off black experience as the domain of blacks, restrict the telling of women's lives to other women, and leave the Holocaust to the Jews.^{*7}

(黒人の経験を語るのは黒人の領域のみに割り当て、女性の人生を語ることを他の女性のみに限定し、ホロコーストを語ることをユダヤ人のみに許す、という文学的部族意識—このアイデンティティ・ポリティクスの時代において蔓延している—に対して、フィリップス氏はあえて挑んでいるのである。)(筆者訳)

アイデンティティと経験に応じて語りの領域を規定するという、硬直した伝統の境界を越える試みを実践しているというわけである。フィリップスは、自身が語る行為そのものや、その語る内容を通じて、一つの価値観だけに拘泥することの危険性を提唱し、疑い続けることや変化することの重要性を示唆しているのである。彼の作品にあらわれるディアスポラ達のように、常に動き続け、ひとところに安住することのない姿勢が、今後の文学の読みに求められている。

血は液体であり、形状が定まることはない。人間の「血の性質」の本質を探り当て知ろうとする姿勢ではなく、絶えずその意味を問い続ける姿勢こそが、我々には必要なのではないだろうか。

参考文献

- 1) Cheyette, Bryan, 'Venetian Spaces: Old-New Literatures and the Ambivalent Uses of Jewish History', in Susheila Nasta (ed.), *Reading the 'New' Literatures in a Postcolonial Era* (Cambridge: D.S. Brewer, 2000), pp.53-72)
- 2) 加藤恒彦「ユダヤ人ディアスポラと仮想の記憶—Caryl Phillips の「より高い土地を求めて」論—」『立命館国際研究』17(1) (立命館大学国際関係学会、2004年) pp. 105-18
- 3) 馬場美奈子「ユダヤ系アメリカ文学に描かれたアイデンティティの諸相 —ディアスポラ・ホロコースト・イスラエル—」『アメリカ研究』35号 (アメリカ学会、2001年) pp. 1-19
- 4) 本橋哲也『カルチュラル・スタディーズへの招待』(大修館書店、2002年)
- 5) 『越境する世界文学』(『文藝』別冊、河出書房新社、1992年)
- 6) 越川芳明 キャリル・フィリップス 「すばる」(集英社) 2003年2月号 pp. 158-61

^{*7} Shapiro, James, "Diaspora and Desperations", review of *The Nature of Blood*, New York Times Book Review, 25 May 1997